

[書評]

内間直仁著

『琉球方言文法の研究』

沢木幹栄

琉球方言の文法的研究、特にそのなかでも動詞の研究を精力的に行なっている内間氏の
大著である。

章立ては次のようになっている。

I、代名詞

第一章 代名詞の考察

第二章 代名詞の記述的研究

II、動詞

第一章 動詞活用の通時的考察

第二章 動詞活用の記述的研究

III、形容詞

第一章 形容詞活用の通時的考察

第二章 形容詞活用の記述的研究

IV、助動詞

第一章 助動詞の相互承接

第二章 助動詞の記述的研究

この章立てから助詞が抜けていることからわかるように、本書は琉球方言の文法すべ
での分野について記したものというよりは、いくつかの部門を重点的にとりあげたもの
である。また、琉球方言全体を対象にしていることが本書の特色になっている。構成的に見
ると通時的研究と共時的研究が対をなしており、琉球方言の歴史に対する著者の強い関心
がうかがわれる。

以下に本書の各章について簡単な紹介を試みることにしたい。

代名詞の部では、著者は日本語の代名詞(これには指示代名詞もふくまれる)の体系が、琉
球方言から見たときにどのように解釈されるかを明らかにする。著者は、代名詞は自他の
二極関係構造としてとらえるべきだとする。たとえば、「自称」の「対話者」として「わた
くし」等があり、「自称」の「話材」として「これ」「ここ」があるのに対して「対称」の
「対話者」として「おまえ」等があり、「対称」の「話材」として「それ」「そこ」がある、
といった具合である。

それは、簡単に言えば、コ系、ソ系、ア系を同次元において論じるのではなく、二項対

立の組み合わせでとらえようとする見方である。

まず、最も低い次元ではコ系とソ系が話者と聴者の心的領域を指すものとして対立する。次にコ系とソ系の心的領域がア系の心的領域と対をなし、さらに定称と不定称が対立をなす。いわゆる人称代名詞もこの枠組のなかで論じられている。

このように二極関係構造説をとる根拠として著者は、琉球方言で代名詞がはっきりした二極関係構造を示すことを挙げる。たとえば、奄美・沖縄方言に属する瀬底（沖縄北部）方言（著者の出身方言でもある）では「これ」「それ」「あれ」に対応する語形として kuri (ko系) uri (o系) ari (a系) があるが、このうち ko系とo系とは意味的にほとんど対立を示さない。したがって、ko系とo系の近称とa系の遠称の二極対立になる。このとき、近称は発言者と聴者の心的領域をさすものとなるが、聴者と発言者の一体化意識があるために、この両者は、はっきりと対立を示さないのだと説明する。奄美・沖縄方言のなかには、一方を欠くものもあって、その場合には聴者と発言者の心的領域の一体化は、よりはっきりしてくることになる。

一方、先島方言においては、o系とa系の対立がぼやけ、(方言によってはa系を欠く)いわゆる遠称にあたるものがなくなって発言者と聴者の対立のみになる。

以上の事実から、前述の日本語の代名詞の二極対立構造説が出てくるのだが、著者の分析は心理的側面に重点がおかれ、読者にとっては不満が残る面もある。

それぞれの方言の代名詞の体系は整理された表の形で示されるが、その体系を発見したプロセス、あるいはその体系の妥当性については説明が十分とはいえない。すくなくとも、アレは使えるがコレは使えない、というような使い分けをしめす例文が挙げてあったらと思う。

更に著者は話材の代名詞（「これ」「それ」「あれ」に当たるもの）をどのように使い分けるかという観点から、琉球方言のなかでどのような類型が見られるかを述べる。今までの研究のなかで、個々の方言の指示代名詞について述べたものはあったが、このように琉球方言全体を見通したうえで類型化を行ったものは本書がはじめてであろう。また、琉球方言で、ko系 o系 a系が対等の資格で対立するのではなく、これらのうち一者を欠いて残りの二者が対立する、あるいは三者のうち二者の区別がはっきりしなくなって、のこりの一者と対立を示す、という形で二極化の傾向が著しいことを指摘したのもこれがはじめてではないかと思われる。

著者は奄美・沖縄型の体系の成立の要因をアガーミ意識に、先島型の体系のそれをワッター意識にそれぞれ求める。アガーミとは、聴者をも含めた inclusive の一人称複数（聴者を含めていう「われわれ」）であり、ワッターとは、聴者を含めない exclusive の一人称複数である。ただし、本書のなかでは、inclusive、exclusive という言い方は使われていない。アガーミ意識では、発話者と聴者の一体化した心的領域があり、ワッター意識では、この両者は、はっきりと区別されていると本書では述べられている。

著者は瀬底方言のアガーミ意識による表現として tju (人) を三人称のみならず、一、二人称としても使用すること(筆者はフランス語の on やドイツ語の man を連想した)、発話者が

聴者のところに行く動作を「来る」と表現すること、「おまえをなぐるぞ」というかわりに「おまえはなぐられるぞ」と表現することをあげ、「話し手が聴者を発言者と同一視し、発言者と一体的にあるものとしてとられるからこそこのような表現が生まれる」と主張する。

筆者はかつて、宮古(先島)の少年に「これをあげようか」の意味で「これをもらうか」ときかれて戸惑ったことがあるが、あれもアガミー意識による表現だったのだろうか。

代名詞の体系が先島型の地域ではワッター意識の影響があったことになるが、こうした地域にはアガミー意識による表現はないのだろうか、残念ながらこの疑問に対する答えは本書から得ることはできなかった。意識のようなもので言語現象を矛盾なく説明するのは難しいのではないだろうか。

動詞の部分は著者が最も力を入れて書いたと思われる、本書全体の半分以上のスペースがあてられている。

「動詞の通時的考察」と題する章で取りあげられている動詞は、「書く」「居る」「ある」「する」「来る」「思う」「買う」「笑う」「食う」「言う」であり、それらについてそれぞれ祖形とそこから現在に至る変化が考察されている。もちろん、動詞の全体像ということからいえば、一段系、二段系の動詞が欠けているし、四段活用も、八行以外のものが足りないのであるが、琉球方言全体を視野に収めた考察として、これは貴重なものである。

琉球方言(首里方言など)の終止形は *katjun* (「書く」)のように、本土方言の「居り」に関係があると思われる形を語形の一部として取り込んでいることが古くから注目されている。単に「カキマリ」に対応しているならば、語末の *N* がどのようにして生じたのか説明は困難であり、その点を解決するためにいろいろな説が出されてきた。

著者は、対応の仕方から、奄美・沖縄方言と先島方言に大別したうえで、前者の終止形の祖形として *kakiworimu* (「書き居りむ」)を立てる。*wori* は「居り」に *mu* は推量の助動詞「む」に対応すると考えるのである。奄美・沖縄方言の終止形についてはいろいろな説が出されているが、決定打と言えるものはまだ出ていない状態である。本書の説もひとつの可能性として真剣に検討されるべきものだろう。

先島方言は、これに対して本土方言の連用形、あるいはそれに推量の助動詞 *mu* がついた形に対応する(先島方言には終止形がふたつある)と述べられている。

他の活用形についても同様に祖形を立て、活用を再構してみせる。以上の手続きがうえにあげた動詞それぞれについて繰り返される。活用というものがもっている性質から仕方のない面があることは理解しているが、読者の立場からすると記述の繰り返しが多いのは疲れるのである。また、かえって動詞の活用形の対応の全体像がつかみにくくなっているのも困ることである。本書がまったくの書き下ろしではなく、著者が以前に発表した多くの論文を母体としているためにこのようなことがおこったのであろう。

先島方言の接続形(「～して」にあたる形)も本土方言の連用形に対応していると主張するが、これに対しては積極的に異議をのべたい。「書く」を例にとると、宮古方言などでは、連用形は *kaki*、接続形は *kaki* となるが、どちらも本土方言の連用形に対応していながら、

なぜ違う語形に変化したかが説明できない。それよりは、接続形は「書いて」に対応し、連用形は「書き」に対応しているとしたほうが語形の違いをうまく説明出来る。実は、これは名嘉真三の説(『沖縄方言の音便形について』『沖縄文化』50 昭 53) だが、なぜこの説を本書ではとりあげなかったのか疑問である。すくなくとも名嘉真三と内間説の得失を論ずるべきだったと思う。学会のなかでの定説はそのような形で築きあげていくものと信ずるからである。

動詞活用の記述的研究の章では、琉球各地の主要な小方言の動詞の活用について記述を行なっている。それぞれの方言について活用形を設定し、その活用形にどのような助詞等がつくかを例文で示す。また、活用の類型を列挙してみせる。28 の小方言に対して 240 ページ近くをさいているが、これでもスペースが足りなかったのではないと思われる。というのは、ひとつの方言にさくスペースが限られるためか、活用形の意味に関する記述が十分なされているとはいいたいからである。ここに取り上げられた方言のなかで特に重要と思われるものについてはもっと詳細な記述が欲しいところである。

形容詞の部では、いままで言われてきたサアリ活用、クアリ活用に加えてサアリヲリ活用があることを論じている。サアリ活用とは takasaN(「高い」)のように終止形が、語幹 + サ+アリに対応していると考えられる活用のタイプであるが、従来は takaʃe:N のような終止形をとるものもこの活用に含められていた。著者はこれをサ+アリ+ヲリに対応するものとしてサアリ活用から独立させることを提唱している。

形容詞の記述的研究の章では 18 地点の形容詞について、動詞とおなじように記述をおこなっている。

助動詞の部では助動詞の相互承接に関する章が目新しい。これはいろいろな助動詞がどのような順番で接続していくかを記述したものだが、構文論的な問題にふれたものとして評価したい。

ところで、これまで見たように本書の構成は国文法の品詞分類によっているが、はたしてそれですべて割りきれられるのだろうか。というのは、動詞・助動詞(それに宮古方言以外では形容詞も)を、活用を行なう点からひとつにまとめてしまう視点もあるからである。さきの形容詞の活用の違いにしても、copula の助動詞(DEAL、ダにあたるもの)とどうも関係があるのではないと思われる。たとえば、首里の takasaN(高い)、jan(DEAL) に対して今帰仁では tak'a:ʃeN、eN となっている。このことから、形容詞の活用の違いについて新たな説明を考えることもできそうである。活用語を動詞・助動詞などと細分することによって、かえって活用語が全体としてもっている体系を見おとすことにならないだろうか。

前述したように、本書は琉球方言内の小方言をほとんどカバーしており、さらにまた著者は琉球方言の話者として自らの方言を内省できる立場にある。いってみれば、フィールドワークの厚みに加えて、話者の直感を駆使したのが本書である。

これだけの大著であるので、細部について筆者の考えと違うところがあるのは仕方がな

い。また、筆者の理解が十分でないところがあるのかも知れない。

ここで、細かい点についてあげつらうのは建設的でないので、全体的な考え方としてとりあげていただきたいことを述べることにしよう。

ひとつは、意味に関することである。比較言語学的手法を用いる場合、語形の対応と意味の対応は車の両輪のようなものであると考えられる。音韻と違って、意味の変化は規則的とは言えないが、意味の面をおろそかにすることはできない。動詞の場合で言えば、現在の各方言における終止形の意味を知ることなしに、終止形の成立を考えることはできない。

筆者の経験では、琉球方言に限らず、終止形はインフォーマントから聞きだしにくいものである。「動詞活用の記述的研究」の章を見れば、どのような文のなかで使われるかはわかるのだが、「終止形」の意味を知るには少し足りないように思う。終止形に限らず意味の問題に関しては琉球方言以外の話者としての強みをもっと発揮していただきたいかった。

もうひとつは、対応を考えるとときに単位として何を取り上げるかである。

活用形となっているもののなかには、終止形のように単独で用いられるものと、そうでないものがある。後者の場合には活用形として抽出した形ではなく、むしろ他の形式がついた形のまま、方言間の比較を行なったほうがよい場合があるのではないかと。

例をあげると、「書く」の志向形で、与那国で kago; となり、他の方言では kaka となることが記されている。

本書のなかでは kakamu $\begin{cases} \text{kakan} \rightarrow \text{kaka} \\ \text{kago;} \end{cases}$ という変化が想定されているが、そうではな

く、いったん kakau という形を経たと考えると、与那国方言は志向形のあとに終助詞がついた形、他の方言はあとになにもつかない形が変化した形とも考えることができる。なぜなら、語末の au という母音連続は琉球方言全体で a に変化したのに対し、その他の位置にある au は o; に (または o; を経て u; に) 変化したと考えられる (上村孝二「琉球方言の太陽を意味する語について」『福田良輔教授退官記念論文集』昭和 38) からである。本書のなかでは与那国方言の志向形は単独で使われる例しかないが、これはもともと終助詞を接続させた形から新たに生じた形と考えられる。

実は本書の中には、瀬底方言で、志向形が単独で使われるときと、そうでないときとで形が違うことが述べられる。これは kakan と kaka の対立だが、これも、活用形単独で比較をおこなうことが時により不都合をもたらすことの証拠になるのではないだろうか。

また、仮定形ははじめから ba (「有れば」の「ば」) がついた形で考えたほうが自然である。198 ページで「居る」に対応する動詞の仮定形に対して wori \rightarrow wub という変化を示しているが、一般的に言ってこのような変化はかなり難しい。実際に起きたのは woriba \rightarrow wubba で、これは音韻同化として説明できるありふれた変化である。

もうひとつの例として宮古方言の kakadi (書こう) という形式をあげよう。これは志向形 kaka に di がついたというのが定説のようであり、本書でもそうになっている。di は首里方言の dii (ひとを促すときの終助詞) に対応するのもかもしれないということを承知のうえで

あえて異をとらえるなら、もっと別の分析も可能であろう。diが古語の「で」(「ず」の中止形)に対応するとすれば、kakade(「書かで」)の反語的用法が意志を表わすように意味変化したと考えられる。そうするとkakadiのkakaはもともと志向形であったのではなく、対応の上からは未然形と同列のものとして論じるべきものだということになる。

活用形はあくまでもある共時態で抽出されるものであり、通時的に見て固定しているものではない。対応を考えるときに、活用形を単位とするのは適切でない場合もあるのではないか。

もうひとつ気になったことがある。それは、音韻対応についての知識が読者に仮定されているということである。*印をつけた形から現在の形への変化は→で示されるが、実際のところ、その変化が問題の方言で可能なものかどうかは普通の読者にはわからない。ある変化が音声学的に可能であるということと、特定の方言で実際に起こったかどうかということはまったく別の問題なのである。そうした判定のための情報は本書でも、また他のところでも十分に得られるわけでない。

その意味からは、琉球方言対応辞典の必要性を切実に感じる。共通の確実な基盤がなければ琉球方言の歴史をめぐる議論もかみあわないままで終わってしまう危険が大きい。

対応に関して一つだけ筆者と本書と意見を異にする例を挙げよう。

宮古方言の「来る」の条件形 kiŋi の祖形を kie としているが、これは本土方言の語形から見ると不自然な形である。むしろ kire とすれば、変格活用を一段活用または、四段活用化した形となり、音韻対応から言っても不自然ではない。というのは本土方言の CirV (Cは無声子音、Vは広い母音)に対応する r は s に変化することが多いからである。

また*印をつけた語形が琉球方言の歴史のなかで、どういう位置にあるのかが、はっきりしないことも残念である。琉球方言が本土方言と袂を分かって独自の道を歩み始めたあとかどうかによって本土方言の扱いが変わってくるからである。

以上、注文めいたことばかり述べてきたが、それは、琉球方言の真のすがたにせまるためには議論が尽くされるべきだと考えたからにほかならない。この分野の研究を志す人にとって本書は必読のものであると信じる。本書を通じて議論が更に深まることを期待したい。

(昭和59年2月25日発行 笠間書院刊 A5判 718ページ 19000円)

—国立国語研究所員—

(昭和61年10月13日 受理)